

たいたと大喜びで鉄砲をむけました。その時、サルは二人にむかつて両手をあわせ、まるで、人間がうたないでくれとおがんでいるようでした。しかし、二人はそんなことはかまわず、ねらいをつけ、「バーン、バーン」と、サルをうちとつてしまいました。そして、うちとつたサルをみると、みごもつていたのでした。

すると、その年の春から、氣候が不順で、夏になつても寒い北風が吹き、冷雨が毎日のようにふりつづき、これが秋までつづき、その年は米はもちろん、ソバやヒエそして、大豆や粟も、みな実がはいらず、大凶作となつてしまいました。

そして、これをきいた芦の草の人たちは、こんなわるい凶作になつたのは、サルのたたりがちがいないと、道ばたに小さな供養の塚をたて、一年に何度かあつまつてはサルの供養をしたそうです。

それからは、ひどい凶作もなく、農作物もよくとれるようになり、だんだんと豊かになり、その塚は庚申さまとよばれるようになったということでした。